

聖書は心にたくさんのタイムカプセルを埋めてくれた。

幼稚園から大学までミッションスクールに通った私にとって、聖書は身近な存在だった。聖書朗読だけでなく、神父様や先生のお話、絵本、宗教の授業を通じ、さまざまなかたちで聖書の言葉に触れてきた。

当時はあまりピンとこないものも多かった。たとえば、「善きサマリア人のたとえ」は幼稚園生の私には、自分を犠牲にしても人を助けることはそこまで難しくないのに、なぜ先生たちは「大事だよ」と言ってくるのか不思議だった。ほかにも、パウロのコリント人への手紙にある「愛について」は、学生の私は、愛は小難しいものなのだな、としか感じなかつた。

しかし、社会人になり、仕事や結婚などいろいろな経験をする中で、過去に触れた教え・言葉の意味を痛感し、すっと胸に染みる瞬間に直面するようになった。

自分で生計を立てるようになった今、人を助けるために躊躇いなく自分のものを差しだす「善きサマリア人」でいることがどれほど難しいかを実感する。寒さで凍える人を前に、頑張って働いたお給料で買ったお気に入りのコートを与えることはできない。ただ、完全にサマリア人にはなれずとも、少しでも弱者に寄り添える自分でありたいと、持っていたカイロを渡すよう、自分を律する。手元にはコートと少しの罪悪感が残った。結婚式で「愛について」の聖書朗読を聞いた際は、「愛はすべてを信じ、期待し、耐え忍ぶ」の覚悟の深さを、生まれ故郷から遠く離れた地へ嫁ぐことを決意した自分と重ね合わせた。

これらの瞬間は、まるで昔埋めたタイムカプセルを開いたかのように、幼かった当時、聖書の言葉を味わいきれなかつた思い出と、今現在の聖書の言葉が染み込んできた私が混じり合う不思議な感覚がした。私自身の成長や擦れに気がつくとともに、失われた純粹さに郷愁を覚えるのだ。

きっと私の心にはまだたくさんのプレゼントが眠っているのだろう。母になり、年老いて、いくつもの季節を経るたびに、眠っていたその蓋が一つずつ開かれてゆく。そのときになって初めて、幼いときに聖書から受け取った贈り物に気づくのだろう。

それは私の成長を喜ばしく感じるものなのか、純真さの喪失を痛感させるものなのか  
は分からぬ。開ける怖さもある。それを含め「開けたときのお楽しみ」だ。

日常では開く機会のなくなってしまった聖書。たまには読んでみるのもよいかもし  
れない。今は心に響かなくとも。それは、将来の私宛てのタイムカプセルなのだから  
ら。